

ラジオ放送
＜令和6年1月～3月放送分＞

ON AIR



金光教の声

No.446

もくじ ~ contents

<先生のおはなし>

☞ 金光教の先生のお話です。

- 年頭放送 限りなきご恩 page 1
金光教教主 金光浩道
- 透明な時間（私からのメッセージ） page 5
大阪府・枚方教会 四斗晴彦
- 明るい花（私からのメッセージ） page 9
愛知県・額田教会 河邊芳美
- 奇跡の軌跡（私からのメッセージ） page 13
三重県・松阪新町教会 水野照雄
- てんちのかみさまのいうとおり page 17
福岡県・北九州八幡教会 野中正幸
- 姿かたちは無くても page 21
東京都・町田教会 川越基如
- イヤイヤ星人 page 25
大阪府・松島教会 和田晴子
- 母が私に遺してくれたもの page 29
奈良県・王寺教会 楠木真理子
- 生きていてくれてありがとう page 33
兵庫県・洲本教会 松井金光
- 私の頭も痛むけれども page 37
徳島県・佐古教会 向井道江
- ままごと遊び page 41
福岡県・漆生教会 鳥越正克
- 不安の渦に巻き込まれた時には（信心ライブ） page 45
- 泥まみれの靴（私からのメッセージ） page 50
兵庫県・三木教会 片島斎弘

《年頭放送》

「限りなきご恩」

金光教教主 金光浩道こんこうひろみち

新年おめでとうございます。ここに令和6年（2024年）の新春を迎え、皆さまもそれぞれ心新たに、今年一年の健康や幸福を祈られたことでしょう。

私ごとで恐縮ではございますが、かつて金光教教主を勤めていた私の祖父は、歌人でありました窪田空穂先生くぼたうつぼに師事して、和歌を作ること
に大きな喜びを感じており、その生涯に、4万首を超える歌を詠んでおります。これらの歌は、19集に及ぶ歌集に収められておりますが、歌を詠み続けた祖父が、昭和41年に私が誕生しまし

た時、次のような歌を詠んで祝ってくれました。

ちちははも子どもと共に生まれたり育たねば
ならぬ子もちちははも

ちちははも子どもと共に生まれたり育たねば
ならぬ子もちちははも

この歌を詠んだ時の思いを、祖父は次のように書いております。

「私は自分の家に内孫ができた時、孫ができ
たということは、その孫と一緒に、孫の父母や
祖父母ができたことで、よりめでたいのだと思
った。その時の感慨を、『ちちははも子どもと
共に生まれたり育たねばならぬ子もちちはは
も』と詠んだが、このような気持ちを今の親た

ちにとってもらいたい。今の親は、子どもに良い子になってほしいとか、一生懸命勉強してくれとか、ただ親の希望だけを子どもにかける。

このような親のエゴだけでは、子どもは良くない。子どもが生まれて、子どもの父母ができ、子どもが1歳になった時、その父母も親として1歳になる。つまり、子と共に自分も努力し、成長していく気持ちを忘れてはならない。子どもが成長するに連れ、子どもが一つ年を取れば、自分も親として同じように一つ年を取り、一つ年を取った子を何とか理解しよう、その子にふさわしい親になろうと、子どもと努力することが何より必要だ。そういう親の姿がいつか子どもの心を捉え、子どもはその親の姿をまねて成長していくからだ」

祖父はこうのように書いております。

生まれてきた私と、私の両親に向けて、親も子も共に学び合い、育ち合っていくようにと、祖父は願ってくれたのであります。

現在、私には3人の子どもがおりますが、子どもが生まれてくれたおかげで、私ども夫婦は親にならせていただいたわけであります。長男が生まれた時、私ども夫婦は、父親、母親となつて、親子関係が生まれ、子どもと親とは、いわば親子学校に同時に入学したわけです。「子を持って知る親の恩」などと言われますが、まさにそのことを痛感する毎日であります。祖父の思い、そして両親のご恩に、少しでも報いることができますよう、親も子も共に学び合い、育ち合っていきたいと願っております。

さて、子どもの成長に連れて、幼稚園のPTAのお役を頂いたことがありました。いろいろな活動に触れさせていただき、ふと気づかせてもらったことがあります。私が幼稚園、小学校、中学校の時も、PTA活動をしてくださった方々のお世話になってきたんだな、ということですよ。そしてこのお役は、ご恩返しのお役なんだということですよ。自分から見れば、過去に周りの方々にしていただいたことですが、遠い昔のことだといふ忘れがちになります。もちろん、お世話になってきたのは、それだけではありません。さまざまな方面で、様々な人や物の世話になり通して、ここまで来ているということ。そして、それらを忘れてしまっていることが多いのに気づく機会を頂きました。過去のご恩に

目覚めさせていただいた、貴重な経験でした。

例えば、子育てにしても、PTA活動にしても、自分は過去にさせていただいてきたのに、自分ではない、したくないということでは、社会は回っていかないと思います。お世話になったご恩を忘れていないかということです。ご恩を知り、ご恩に報いるということが、非常に大切なところだと思わさせていただきました。もちろんこれから先も、たくさん気づかせていただく機会があると思います。できるだけたくさんのおかげ、ご恩に目覚めさせていただき、そして、それらを忘れず、ご恩返しのお役に立たせていただきたいと願っております。

2024年、新しい年を迎えさせていただきましたが、今現在、とても平和とは言えない世

の中になってしまっています。自分が家庭を持った今、「世界の平和も、家庭の平和から」と、神様から言われている気がするのです。天地の中で生かされ生きている者として、「共に生きる」「共に助かる」という考え方を大切に、特に、戦争、飢餓、貧困、病気などに苦しむ人々に思いを馳せ、国の内外の人と人々が、お互いに神の子として、国籍、人種、言語、宗教などの違いを越えて、共に生き、共に助かって、世界に真の平和と繁栄がもたらされることを、心新たに願わずにはいられません。

《私からのメッセージ》

「透明な時間」

大阪府・枚方教会 ひらかた 四斗晴彦 しとはるひこ

令和5年の夏、私の恩師とも言える金光教の

先生が亡くなりました。享年67歳。エネルギー満タンで、いつも動き回っていた男の先生でしたが、その年の春に突然倒れ、意識が戻らないまま旅立たれました。

私はその先生とは、金光教の事務所で延べ7年間、共に働きました。発想力、企画力、行動力に溢れた方でした。いつも新しい世界を見せてくださり、前へ進むために、背中を押してくれました。

職場では、2人ともお酒が好きだったので、

仕事が終わると、よく飲みながら遅くまで語り合いました。2人ともが酔っ払って記憶を無くし、明るる日になってみると、昨日は何を話していたのか、全く覚えていないことも度々ありました。

2人ともが何も覚えていないのですから、全く無駄な時間であったとも言えます。しかし、今、真っ先に頭に浮かぶ先生との思い出は、共に語った時間がそこにあり、その時間を分かち合ったということです。振り返ると、たまらなく愛しい時間です。

私には、もう一人、同じ年に亡くなった身近な友人がいます。私の高校の同級生です。数少ない異性の友人でした。卒業後も、親しい仲間と会えば、私たちのくだらない話をよく聞きな

がら、いつも笑ってくれました。彼女自身、仕事に、恋愛に、すごく苦しんでいる時にも、それは変わりませんでした。

やがて彼女は結婚し、2人の子どもにも恵まれました。地元から遠く離れたところで暮らしていたので、直接会う機会はありませんでした。しかし、彼女とはよく電話で話しました。それは、私が共通の友人とお酒を飲んでいる時で、酔っ払っていると、いつもどちらからともなく、彼女に電話しようということになるのです。彼女は、子育てで忙しいさなかでも、いつでも酔っぱらいの戯れ言を聞き続けてくれました。私たちは、そんな彼女の優しさに甘えて、酔っ払っては電話をして、たくさんのかたを聞いてもらいました。20年くらい、そんな関係が続いて

いきました。

何カ月か前、同じように彼女に電話した時、彼女は出ませんでした。折り返しの電話も掛かってきませんでした。年が明けて、いつも届く彼女からの年賀状が届きませんでした。しばらくして、彼女が亡くなった旨の連絡が届きました。病と闘いながらの最期であったことを知りました。54年の人生でした。

その事実を知り、しばらくボーっとしながら、彼女のことを思い浮かべます。最後に直接会ったのは、彼女が結婚した時。結婚式での幸せいっぱいの笑顔、未来への希望に満ちあふれた姿がよみがえります。私は彼女に謝りました。「あなたの病気のこと、全然知らなかった。ごめんと。

私は、神様の前に額^{ぬか}づき、彼女が亡くなったことを伝え、御霊^{みたま}様としての立ち行きをお祈りしました。すると、しばらくして、ある思いが湧いてきました。

彼女は、人の話を聞くのが大好きだったのではないか。笑みを絶やさず、いつもうんうんと頷^{うなず}いてくれる姿は、まぎれもない彼女そのものではなかったか。本当の彼女がそこにいたのではないか。酔っ払いの電話も喜んで聞いてくれていたのではないか…。

それは、私の傲慢な思い込み、そうであってほしいという願望です。しかし、彼女の姿、声を思い起こすと、そうとしか思えなくなってきたのです。彼女は、人の話を聞くという時間を慈しみ、愛しく思ってくれていたのではないか。

我々が彼女と話す時間を愛しく感じていたのと同じように…。

祈る時間が流れる中で、私の心はゆっくりと静まっていきました。

祈ること。生産性や合理性の視点からは、全く無駄な行為であるでしょう。祈っている暇があったら、何か実践すれば、と思う人もいるかもしれません。

しかし、我々がこの世に生まれ、様々な人との間に培^{つちか}われる、ご縁^{えにし}は決して合理性によって生まれるものではありません。人智を超えたはたらきの中で、誰かと出会い、別れ、今の自分がいます。いつ誰と出会うかなんて、自分ではコントロールできません。だから、巡り会いの奇跡を大いなるものに祈ります。

昨今は、「タイパ」という聞き慣れない言葉を耳にするようになりました。タイムパフォーマンスを略して、「タイパ」。かけた時間に対して、どれくらいの効果や満足が得られたかを示す言葉です。タイパが良いとか悪いとか。

しかし、ご縁のあった人と触れ合う時間。何をするともなく過ぎ去っていった時間。その時間を慈しみ、その時間を共有できたことに、人生の豊かさを感じるのが、人間という生き物なのだと感じるのです。

幼少の頃を思い出しても、日が暮れるまで友達と外で遊んでいました。そこで何かを生み出すとか思わず、成果を求めることもなく、目的もなく遊んでいました。ただ楽しい、それだけでした。いつしか、大人になるにつれ、生産

性や合理性、効率、成果などという言葉がまわりついてきます。

でも、そこから離れたところに流れる、人との間の、尊い、豊かな時間を、神様からの贈りものとして大切にしていこう。それが、2人を通して私が受け取ったメッセージであり、皆さんに伝えたい私からのメッセージです。

《私からのメッセージ》

「明るい花」

愛知県・額田教会 河邊芳美

おはようございます。愛知県岡崎市おかざきにあります、金光教額田教会ぬかたの河邊芳美よしみと申します。

昨年のことですが、大阪で仕事をして、その帰り道、名古屋で新幹線を降り、在来線に乗り換えようと、名古屋から岡崎方面に向かう電車のホームで、2列に並んで待っていました。しばらく経って、岡崎に止まる特急電車が入ってきたので、順番に乗り込んでいきますと、まるで椅子取りゲームのように、我先にと座る場所を皆が確保していきます。私も負けまいと、4人座りのボックス席の通路側を確保しました。

「ああ、座れた」と安堵したのも束の間、通路を挟んだ斜め向かいの席に、30代位の女性が今座ったかと思うと、一旦立ち上がり、また座り直し、なぜか私のほうを見ます。それに気づき、周囲をよく見ると、隣の車両との連結の壁際の所に、30代くらいの男性と、60代くらいの男性2人が立っていました。彼女があまりにも長い時間私を見つめるので、「え、私に60代の男性に席を譲れと言っているの？ 私は50代で、あまり変わらないんだけど」と躊躇ちゆうちよしていたら、彼女は見かねたのか、意を決したのか、60代の男性に席を譲ってあげたのです。結局、彼女は2つ過ぎた駅で降りるまで、立つことになってしまいました。

彼女はもしかしたら、私を見ていたのではな

く、席を替わるかどうかを思案していたのかも
しれません。やっぱり席を譲ろうと、譲った彼
女の行為に、周りも優しさに包まれました。き
つと神様も彼女の行為を喜ばれて、いつかどこ
かで、彼女に優しさが返ってくるんだろうなど
思いました。

私は何だか自分の行動が恥ずかしくなり、途
中で彼女に席を譲ろうと思っていたのですが、
声をかけそびれてしまいました。私は、そんな
彼女の優しさを垣間見て、あることを思い出し
ました。

私には、ダウン症の娘がいました。生前、娘
と2人で電車やバスを利用した時のことです。
いつもなぜか男女問わず、それも20代の若い
方がよく席を譲ってくださいました。ダウン症

の娘を氣遣ってくださいたんでしょう。その優
しさに出合うたびに安らぎを覚え、持っていた
悩みも軽くなり、何度も優しい気持ちになりま
した。

今度は私が、その受けた恩を少しでもお返し
したいと思いました。他の人に、「優しさのバ
トン」をつなげていこうと思ったのです。最初
は声を掛けるのにも勇気がいりましたが、年配
の方をはじめ、子ども連れのお母さん、妊婦さ
ん、また、たくさんの手荷物を抱えている方に
思い切って声を掛けてみると、大変喜んでくだ
さいました。何度も席を譲っていくたびに、私
も温かい気持ちになり、ある時、黄色く光った
一輪の明るい花が、私の心にパッと咲いたんで
す。そんな何とも不思議な体験をしました。自

分でも驚き、こういう行為を続けていると、このような花を心に咲かせられるんだなど、実感しました。そして、何だか満たされた幸せな気持ちになり、相手からも、「ありがとう」と言われ、なおさらうれしさが増したことを思い出しました。きっと、神様が彼女をおして、その時の気持ちを思い出させてくださったんだと思うんです。

先日も、こんなことがありました。

岡崎から名古屋方面に向かう電車に乗ろうと、ＩＣカードで改札を通ったのですが、ＩＣカードの金額が不足していて、目的地でお金をチャージすることになりました。

目的地に着き、改札出口付近にあるチャージ機に並ぶと、私の前に並んでいた年配の女性が、

悪戦苦闘していました。そこは、券売機のようにカードを差し込んで、チャージをするタイプのものではなく、透明のカプセルにＩＣカードをセットして、チャージをするタイプのものでした。もしかして、やり方が分からないのかなと思い、「ご一緒にしましょうか」とお尋ねすると、「お願いします」と言われました。ゆっくりと説明をしながら、無事にお金がチャージできると、相手の方も、「助かりました」と喜んでくださいました。実は私も以前、使い方が分からず、この方と同じように助けていただいた事があったんです。

このように、人に優しく親切にしていると、人のお役に立てたうれしさからか、心が温かくなって、晴れ晴れとした気分になります。

昨今、いろんな悲しいニュースが多い中で、優しい心遣いに出会うと、心が和み、安らぎを感じます。優しい心を表すと良い関係が生まれます。それは相手と自分の間が、人を思いやる神様の心でつながっているからです。

優しさは誰かを助け、自分の心にも明るい花が咲くような助かりを生み出し、お互いが助かり合う力強さを感じます。もしかしたら、優しさを表す事は、知らず知らずのうちに、相手をお願いする豊かな心を育て、自分の心が助かる幸せを掴んでいるのかもしれませんが。そして、人を思いやる心は、平和な世の中を築く一助を担っているのだらうと思います。

あなたにできるどんなことでも良いんです。優しさは誰もが持っている神様の心です。

私も神様から頂いた優しい心を現して、お役に立ちたいと思います。

今日もどこかで明るい花が咲きますように。



《私からのメッセージ》

「奇跡の軌跡」

三重県・松阪新町教会 水野照雄

おはようございます。三重県、金光教松阪新町教会の水野照雄と申します。今日は、今年大学を卒業した女性のお話をします。名前は由香さん。

2020年、彼女が受験生の時のことです。お正月に家族そろって、金光教の本部にお参りして、大学合格を祈願をしました。そして、金光教の教主である金光様にお話をして、お願いしました。金光様は、「神様をお願いして、ちゃんと努力すれば、あなたにとって一番良い道へ導いていただけるからね」と言ってくださっ

て、その言葉を心の支えに頑張って、最後の最後、3月になってようやく、一度は諦めかけたけど、ほんとには一番行きたかった大学に合格することができた、という話…。実は以前、この金光教のラジオでも、お話ししたことがあるので、既に聞いてくださった方もいるかもしれませんが。今日のお話は、それからあとの出来事です。

新型コロナウイルス感染症の流行拡大とともに、由香さんの大学生活は始まりました。なかなか思うに任せぬことも多かった中、ようやく3年生の時、待望の語学留学が決まります。フランスの大学へ約半年間、通うことになったのです。

フランスへ渡った最初の日のことです。コロ

ナの影響で直行便がなく、長い時間、飛行機に乗って、ようやく、シャルル・ド・ゴール空港に。留学先の街はパリから、200キロメートルほど西へ行った所なので、そこまでは長距離バスでの移動になります。普通なら4時間ほどの道のりです。が、ここでトラブルに見舞われます。しばらく走った所で、バスが動かなくなってしまったのです。車両の不調ということで、途中で何時間も待たされたあげく、故障は直らず、代わりのバスが手配されることになりました。そのバスが来るまで、また、待たされます。結局、元々の予定では夕方にはその街に到着し、留学先の大学が準備してくれた寮に入るはずだったのが、遅れに遅れて、着いたのが夜中の11時を過ぎてしまったのです。日本よりも緯度の

高い所ですが、さすがにもう真っ暗です。

長時間の移動で疲れも溜まってるし、何より、知らない人ばかりの中でひとりぼっちで、心細かっただろうと思います。

バスを降りて、さてどうしたらいいのか……。その時、声をかけてくださった方がいました。同じバスに乗り合わせていた、2人の女性。現地の方でした。東洋人の小さな女の子が、大きなスーツケースを持って、1人でポツンと立っている。きつと、困っているに違いない。そう思われたのでしょうか。

「どうしたの？ もう遅いから、うちに泊まっていきなさいよ」。そんなふうに声をかけてくださったのです。もちろん、フランス語でのやりとりです。その2人は、この街に住んでい

るお母さんと娘さんで、娘さんが由香さんより、ちよつと年上のお姉さんでした。

ご好意に甘えて、その日は、そのご家族の所で一泊お世話になり、次の日、寮まで車で送ってもらうことにしました。その時、「何か必要なものがあれば」ということで、台所用品などを貸してもらいました。もう使っていないからと、結局もらい受けることになりました。それだけでなく、「また、うちへ遊びにおいで」と言ってくれて、連絡先も交換しました。

その後、休みの日に街を案内してもらったり、一緒に買い物に行ったり、お宅へお邪魔したり、長期休暇には泊めてもらったりして、その家族と親しくなっていました。時には由香さんが準備をして、家族に日本食を振る舞ったことも

ありました。

もちろん学校でも、いろんな国籍の友達ができて、それも大切な体験でした。でも、誰も知る人のいない、遠い外国の街で、このように家族のような存在ができたことは、半年の留学生活において、どれだけ心強いことだったでしょう。

留学が終わって、日本に帰る時には、「今度は日本に来てね」と、再会を約束するほど、仲良くなっていました。

こんなことがあるんだな、と思います。たまたま同じバスに乗り合わせた。たまたま同じ街で降りる人たちだった。もし何もなければ、何の関係を結ぶこともなく、きつとすれ違っていたでしょう。でも、トラブルのおかげでと

言う、ちよつと言い過ぎかもしれませんが、そのことがあつてこそ、出会うことができ、親しい間柄になることができた。そのように思えてなりません。

『人間万事塞翁が馬』、こんな諺ことわざがあります。悪いことがあれば、良いこともある。そういうことつてあるよね。そんなふうに思われる方もあるかもしれません。

でも、私には、もっと深いところに“何か”があるように思えるのです。思い出すのは、由香さんが大学受験の時に、金光様から掛けてもらった言葉です。「神様をお願いして、ちゃんと努力すれば、一番良い道へ導いていただける」。それは、大学へ入った時のことだと、私は思っていました。でも、それだけではなかつ

たんです。その道は、その後もずっと続いていくのです。だから、こんな奇跡みたいな出会いに導かれたのだと、今はそんなふうに思います。

由香さんは、その後も学校のことや、卒業・就職にまつわるいろんな出来事で、またまた迷ったり悩んだり、ときには行き詰まったりしながらでも、神様をお願いをして、一つひとつの事柄をクリアしていきました。きっと、あの日あの時もそうであつたように、今も神様と一緒に、その道を歩んでいます。

《先生のおはなし》

「てんちのかみさまのいうとおり」

福岡県・北九州八幡教会 野中正幸

（ナレ）おはようございます。案内役の岩崎弥生（いわさきやよい）です。新しい命の誕生には、それぞれに物語があるように思います。

今日は、福岡県・金光教北九州八幡教会、野中正幸さんのお話で、「てんちのかみさまのいうとおり」。

（野中）「どちらにしようかな。てんちのかみさまのいうとおり」

金光教の教会で生まれ育った、4歳になる私の娘が歌っています。

「幼稚園でね、お友達が、『てんのかみさまのいうとおり』って歌うから、私は、『てんちのかみさまのいうとおり』って歌ったんだよ」。

金光教には、「天と地の間に人間がいる。天は父、地は母である」「神様のご神体は天地である」という教えがあり、天地全体を神様として仰ぎ称えています。私は金光教の教師として、福岡県の教会で奉仕し、家族と共に金光教の教えを大切にしながら生活をしています。娘は教会で生活する中で自然と、「てんちのかみさま」を知り、歌うようになったのでしよう。なんとも微笑ましく、ここまでの娘の成長を神様にお礼申し上げます。そして、「てんちのかみさまのいうとおり」と私も口にしながら、ふと娘が生まれた時のことを思い出しました。

4年前の3月、出産予定日の朝、妻に陣痛が始まり、産婦人科へと向かいました。初めての出産で、妻も私も緊張しています。結婚して、初めて金光教を知った妻は、手を合わせて神様にお願いしているようでした。

陣痛はきているものの、生まれる気配はありません。一日が過ぎ、翌日の午後から陣痛促進剤を投与することになりました。促進剤によって痛みが増すようで、妻は青い顔をして苦しんでいます。3日目を迎え、お医者さまから、「午前中頑張つてだめでしたら、夕方、帝王切開手術をします。そうしないと、母子共に危険ですから」と言われました。妻も私も想定していなかった、「帝王切開手術」という言葉に驚きました。痛みの中、午前中も気配はなく、夕方、

いよいよ手術を受けることになりました。

私は、懐妊の知らせを受けてからずっと、出産が難産にならず、母子共に健康で、すんなりと生まれるよう神様をお願いし、結婚して金光教を知った妻に、出産をとおして、神様からおはたらきを感じてほしいと思っていました。母子共に3日間、よく頑張ってくれたと思うと同時に、私の願いが神様に届かなかったと、落胆する気持ちも少なからずあったのです。

手術の無事を祈りながら、複雑な気持ちで待ちました。約40分後、待合室まで大きな泣き声が響きました。元気な女の子が生まれました。私は、うれしくほっとした反面、手術になったことに引っかけりを感じていました。しかし、お医者さまから受けた説明で、その思いが一変

しました。

お腹を切ってみると、テニスボールの一回り小さいくらいの子宮筋腫が見つかったということです。そのせいで、赤ちゃんが下りてくることができず、手術せずには生まれなかったと、お医者さまが話してくれたのです。私は、驚くとともに、全身の力が抜けてしまいました。神様に願いが届かなかったのではなく、帝王切開でしか生まれてくる方法はなかった。私の願いを超えた、神様の大きなおはたらきを感じました。

これまで妊婦健診の時には、お腹の中の赤ちゃんの様子をカメラで写し出してくれました。それだけ技術が発達し、何でも分かるように思っています。人間には分からないことや、気づかないことがたくさんあるのだと、強く実

感させられました。

手術の後、妻はその時の思いを話してくれました。

「自分のお腹の中が、そんなことになっていたなんて思ってもみなかったし、お腹を切ることになるなんて思わなかった。何でも当たり前じゃないし、自分が想定していたことと違うことも起こってくる。きつかったけれど、出産の大変さや、命の尊さが一層分かったし、技術や人間の限界も分かった。神様に、ありがとうございますと、全てを感謝しながら、良いように導いてくださいと祈ることが大事だね」

生まれたばかりの赤ちゃんの寝顔を穏やかに見つめながら、妻はそんなふうに話してくれました。

私も、自分の考え、価値観で物事を決めつけず、いつでも神様に、「どうぞ教えてください。良いほうを分かせてください。導いてください」と、お願いすることの大事さを学んだのでした。

そして今、笑顔で、「てんちのかみさまのいうとおり」と歌い続ける娘を見ながら、娘がもう少し大きくなったら、この出産の時の話をしよう、先々を楽しみにしています。

いかがでしたか。私も出産の経験がありますが、「3日間の陣痛」、想像しただけで、気が遠くなる思いがします。お母さんも赤ちゃんもよく頑張りましたね。そして、よくぞ生まれてきてくれました。ある意味、子宮筋腫があるこ

とを知らずに、不安なく出産まで来たことは、救いだったのかも知れません。

医療が進歩しても、まだ人間には分からないことがある。そして、気がつかないけれど、大きなお守りがあるということを、ひとつの小さな命に教えられました。

私も、分からないことがあるのだから、せめて素直に、「てんちのかみさまのいうとおり」ができるようになりますように。

《先生のおはなし》

「姿かたちは無くても」

東京都・町田教会 川越基如

(ナレ) おはようございます。案内役の大林誠(おおばやし まこと)です。先日、近所で足場の組み立て作業をしていました。若い人たちのパワフルな仕事ぶりがあったけにとられて見ていたら、現場監督が、「この仕事はきついですからねえ、30歳を越えたらもう体が続かなくなつて、ほとんど辞めていきます」と教えてくれました。

今日は東京都町田市にある、金光教町田教会(まちだ)の川越基如さんのお話です。川越さんは、金光教教師になる前の15年間、とび職をしてきたとか。それを聞いただけで頭が下がる思いがしま

す。タイトルは、「姿かたちは無くても」。

(川越) 私は現在、金光教の教師をさせていただいていますが、教師になる前とはとび職をしていました。私は高所恐怖症で、とてもそのような仕事はできないと思っていましたが、当時、就職活動に苦労しており、親にも心配をかけたくないので、どんな仕事でもいいからと友人に紹介してもらったのです。

入社当時、ビルの新築現場の足場を組み立てる仕事があり、おっかなびつくり、腰を引きながら奮闘する毎日でした。それからも恐怖心はあるのですが、だんだんと仕事に対する誇りとやりがいが生え、一人前のとび職人になりました。と思うようにまでありました。そこで、尊敬

する親方の現場で、修行させてもらうことにしました。時に、恐怖で逃げ出したくなることもありました。そこで技術と経験と自信を得ることができました。

私ごとび職の仕事をすることになって、6年くらい経った頃、金光教の信者であった父が金光教の教師を志し、実際に教師となって、その後、教会を開設しました。信者であった父の生き様を知っておりまして、私はそのことに反対することなく、仕事が休みの日には、教会のことを手伝うようになりました。それから数年後、母から、「あなたも金光教の教師になってくれないか？」と言われたのです。

70歳を過ぎた父。長男である自分が親の跡を継ぐべきなのか？ 私が断れば、父が亡くなっ

た時、今、教会に参拝している信者さんたちはどうなってしまうのか？ といって、自分のような者に金光教の教師が務まるのか？ いろいろと悩みました。そこで、金光教の勉強のために、教祖の伝記を読みました。私は、いつも人のことを思い、神様の御心みこころに沿う生き方をひたすら求め続ける教祖の姿に、なぜか自然と涙が溢れ、「この信心は素晴らしい」と心から思え、後は自分次第だと決心し、父の跡を継ぐことにしたのです。

とび職の仕事に就いた当初は腰掛のつもりで、すぐに違う仕事を探す予定でしたが、気がつけば約15年もの間、お世話になりました。そこでいろいろなことを教わったのですが、とび職の仕事の姿勢は、「自分のことより人のこと

を願え」という金光教の御教えに通じるところがありました。尊敬する親方から、足場一つ作るのでも、自分のやりやすいように作るのではない。ただ自分の仕事をすばいというわけではない。その足場を使う人のことを思って、使う人が仕事をしやすいように作らせてもらうことが、大切なだと教えられました。また、台数に限りがあり、皆が我先にと使いたがるクレーンを使用する時は、自分は後回しになっても、人に譲ってあげることを心掛けました。そうすることで現場の雰囲気も良くなり、自分にとっても働きやすい、良い環境が整っていきました。

そして、とび職の仕事をとおして、金光教の神様が少し分かったように思います。足場とい

うのは大工さんや鉄筋屋さん、左官屋さんなど、たくさん職種の方たちが作業をするためのもので、自分のための足場ではありません。建物が出来上がれば足場は解体され、跡形も残りません。しかし、足場がないと誰も作業ができず、建物は完成しません。姿かたちは残らなくても、無くてはならない大切なもので、その存在を知っている人は知っています。

神様も目には見えず、姿かたちはありませんから、皆がその存在に気づかなくても、この世に生きとし生けるものたちのために、いつもおはたらきくださっている、無くてはならない大切な存在なのです。

世の中には、気づかなかったり誤解していることがたくさんあると思います。先入観にとら

われることなく、見えないものを見る目を養い、自分がしたことに誰も気づかなくても、とび職の経験と御教えから学んだ、「自分のことより人のこと」が、いつでも実践できる自分になれるよう、目を閉じ、心を落ち着けて探せば、きっと出会うことができる神様とともに、これからもお役に立たせていただきたいと願っています。

いかがでしたか。川越さんは、神様のおはたらきを工事用の足場に例えていますね。足場を用意することの苦労と、その役割の大切さ、そしてまた、評価されることの少なさまでも、身に染みて知っている人ならではの例えだなと思います。私たちの命を支えに支え続けて、恩に

着せることを一切なさらない神様のことを、もっともっと分からせてもらいたい。そんな気持ちになりました。



《先生のおはなし》

「イヤイヤ星人」

大阪府・松島教会　和田晴子

（ナレ）おはようございます。案内役の岩崎弥生（いわさきやよい）です。

今日は、子育て真っ最中、大阪府にある金光教松島教会、和田晴子さんのお話で、「イヤイヤ星人」。

（和田）私は、9歳の息子と5歳の娘の母です。娘が生まれ、産婦人科から自宅に戻ってくる時、夫がこう言ってくれました。

「2人目の子どもをお母さんが抱っこして帰ってくると、『お母さんを取られた』とシヨッ

クを受けると聞いたことがあるから、これから私は息子ファーストでいくね」

以来、息子の子育てに関しては、夫が率先してやってくれています。

世間では、1歳後半から3歳頃までは、いわゆる、「イヤイヤ期」を迎えると言われていますが、息子はイヤイヤ期がありませんでした。息子が3歳の時、夫のお父さんが亡くなるなど、いろいろと大変なことが重なりましたが、今思うと、イヤイヤ期がなく、私たち夫婦は助かりました。

一方娘は、最近まで、「イヤイヤ星人」で、良い返事が返ってくることは絶対にありませんでした。「でも」「だけれど」「違う」「そうじゃない」。人の言うこと、することをいち

ち否定してきます。今日履いていく靴下でさえ、準備している物は否定されていました。成長の一環だろうとは思っていても、毎日毎日、全否定され続けるのは、さすがに気分が滅入るものです…。

そんな娘の相手をしながら、ふと思い出したのは、実家の父の言葉でした。私が学生の時、ある人に対しての愚痴をこぼしました。今思えば、わざわざ人に言うほどでもないような愚痴だったと思います。すると、黙って話を聞いていた父が一言だけ、「お前なあ、わざわざ悪いことを人に言うて聞かすな」と言われました。なるほど。私が愚痴を話して聞かすことで、聞いている人まで嫌な気持ちになってしまう。しかも、誰かの悪口を言うことで、その人の価値

も、自分の価値も下げてしまっているのかもしれない。話して何か解決するのであれば、話す価値があるけれども、嫌な気持ちにさせるだけで何も解決しないのであれば、わざわざ悪いことを言うて聞かす必要はないかと、スッと納得がいきました。

それからは、自分の中で解消できることは、わざわざ人に言わないように心掛けました。しばらくはモヤモヤ考えてしまいましたが、相手の立場に立ってみたり、もしかしたらの状況を想像してみたり、思い替えをしていると、そのうち、「これは私にとって必要な出来事だったんだ。起こってくる出来事に、何一つ無駄事はないんだ」というところにたどり着きます。そのようなことを繰り返しているうちに、今では、

「今朝すごく腹が立ったけど、何だったわけ？」と、「忘れんぼうの天才」になりました。あの日の父の一言で、毎日が幸せで、楽に生きる事ができるようになりました。

父の言葉を思い出し、それから毎晩、布団に入り、寝る前に、娘と神様に、目一杯ポジティブなお祈りを捧げることにしました。「神様、ご先祖様、今日も一日ありがとうございます。今日は〇〇が楽しかったです。〇〇がうれしかったです。今日もぐっすり眠れますように。明日も元氣にお目めが覚めて、楽しいことがいっぱいありますように！ おやすみなさい！」。こうした毎日を繰り返していくうちに、娘は、「イヤイヤ星人」から、「お返事名人」に変わっていききました。「〇〇してね」と言うと、「は

いっ！」と齒切れのよい返事が返ってきます。とても気持ちが良いです。

金光教のある先生が次のようにおっしゃっています。

「人間関係の難しさは誰しも体験するけれども、子どものような心を少しでも持てたら、難しさは半減するのではないだろうか。疑ったり、妬んだり、恩に着せたり、ええカッコしてみたり、自慢したり、バカにしたり……。数え上げたらいくらかでも出てくるよこしまな心。子どもはいくら親に叱られても、お父さんお母さんが一番好きな時。よこしまな心はない時であります」

夜寝る時、夫と息子は同じＴシャツを着て寝ています。その背中に書かれているのは、金光様のお歌、『ちちははも子どもとともに生まれ

たり育たねばならぬ子もちちははも』。私たち夫婦は、親としてまだ9歳と5歳ですが、子どもたちは、この未熟な親を一番愛してくれています。だからこそ、「親として子どもと共に成長させてください」との祈りを込めながらの日です。

いかがでしたか。忙しい時、子どもが言うことを聞いてくれない。イライラしますよね。でも晴子さんは、思い返しをしながら、子どもと向き合っている、よくできたお母さんだと感心しました。

私の子育てを振り返れば、感情むき出しで、強引に子どもたちに言うことを聞かせようとする未熟な母親でした。それでも成人した子ども

たちは、優しい子に育ってくれました。夫は、私の話をよく聞いてくれ、私の足りないところを、おじいちゃん、おばあちゃんが補ってくれ、温かく子どもたちを受け止めてくれたことは、大きな支えでした。そして、皆が同じ願いを持って、祈りながら子どもたちを育ててくれたように思います。

「こうしなければいい親じゃない」と、自分でハードルを上げずに、子どもと共に育っていけば良いんですね。どうしてもつらい時は神様に吐き出せばいい。全部受け止めてくれますよ。

《先生のおはなし》

「母が私に遺してくれたもの」

奈良県・王寺教会 楠木真理子

(ナレ)おはようございます。案内役の大林誠おおはやし まことです。

今日は奈良県にあります、金光教王寺教会おうじの楠木真理子くすき まりこさんのお話を、お聞きいただきます。「母が私に遺してくれたもの」というお話です。

(楠木)母が、間質性肺炎かんしつせいはいえんの診断を受けたのは、今から9年前、私が30歳の時でした。お医者さんからは、「この病気に効く治療法や特効薬はありません。残念ながら、ただただ進行してください」と告げられました。

その少し前から、母の咳が気になっていました。が、まさか、そんな治らない病気になるとは思いもかけなかったことで、私の心は不安で押しつぶされそうになりました。

母を心配する、私たち5人の兄妹に対して両親は、「お母さんのこの病気も、私たち家族のための神様の間違いの無いはずだから、しっかりと受け止めさせてもらおうね。心配は神様に預けてしまい、先のことを楽しみに毎日を通していこうね」と話してくれました。

私の両親は、福岡県にある教会で、金光教教師として奉仕していました。両親は人生に起きる良いこと、悪いこと、全ての出来事を私たち一人ひとりが輝くために、神様が用意してくれた演出として、「ありがたく」受け止めて

いくことに本気で取り組んでいました。このたびの母の病氣に関しても、母が足を怪我して、病院に行ったことがきっかけとなり発見されたので、病気を心配するよりも、むしろ、病氣が発見された過程を、「すごいことだね!」と、2人で喜んでいる様子でした。そんな両親の姿に、私の心の不安もいつの間にか消えてなくなっていました。

母は、診断を受けた後も変わりなく、朝は3時半に起きて、教会のお勤めを果たしていました。家族や周りにいる人に対しても、子どもっぽいいたずらで驚かせようとしたり、冗談を言ってみんなを笑わせようとしたり、以前と変わらないうーモアに溢れる陽気な母の姿がありました。

それから3年の月日が流れ、母の病状はいよいよ悪化してきました。咳は一向に止まらず、食事の量も減り、体重も落ちて、それまで変わらずに続けてきた教会のお勤めもできなくなりました。

「もう長くはないかもしれませんね」と、お医者さんから母の余命が告げられた時は、本当にショックでした。どうしていいか分からず、祈る他に為す術がありませんでした。

その時、私の頭に初めて、「親孝行」という言葉が浮かんだのです。

私は小さい頃から引つ込み思案な性格で、人前で話すのが大の苦手。普段から口数が極端に少なく、何か質問されてもはつきりと物を言わず、何を考えているのか分からない子どもと見

られていました。小学校では不登校になっていた時期もあり、5人兄妹の中で、私が両親に一番心配を掛けたと思います。

そんな私が母に対して何ができるのだろうか、今の母が一番喜んでくれることは何だろうか、自分の人生を振り返りながら考えていると、一本の道筋が見えてきたのです。

これまで、父も母も、私の性格を知ってか、「金光教の先生になりなさい」とは、一度も口にしませんでした。でも、私が、「教会の先生になる」と言えば、きっと、2人に喜んでもらえると思ったのです。「少しでも母の生きる力になれば」との思いで、そのことを両親に伝え、2人とも泣いて喜んでくれました。

そして、私は金光教教師になるため、岡山県

にある金光教の学校に入学しました。しかし、その2カ月後に母は亡くなります。

病床に伏せる母は、最後の最後まで、不平や不足を一言も口にすることはありませんでした。きっと体は痛くてきついはずです。病室には、人工呼吸器を着けて、ベッドで横になり、合掌を続ける母と、全てを神様に任せきり、一心に祈る父の姿がありました。母の最期は、その場に居合わせた誰もが、「かつこよかったね!」と口を揃えて言うほど、すてきな光景でした。

思い返すと、母の大病という、私たち家族にとっては大変つらい状況の中にあっても、家の中には、不思議といつもありがたい雰囲気が流れていたのは、母が自分の身にどんなことが起

きても、それを神様の間違いのないはたらきとして、尊んでいく姿があったからだ気づかされました。

母が病気になるまでは、仕事をして、結婚をして、家庭を築くという漠然とした人生計画しかなかった私ですが、母の病気をとおして、私自身の生き方や考え方に変化が生まれ、絶対にならないと決めていた、教会の先生を目指すことにもなっていました。

私は神様を信じて何が起きても、全てを、「ありがたい」と受けていく母の姿や生き様に触れて、「私も母のように生きてみたい」と思うようになっていました。私にとって、母は今でも、そしてこれから、一番身近なお手本なのです。

いかがでしたか。楠木さんは、お母さんの病気がきっかけとなって、金光教教師として生きる道を選びました。その決心を聞いた時、ご両親は泣いて喜ばれたといいます。それはうれしかったでしょうね。これまでずっと求め続けてきた、信心に基づく生き方、物事の捉え方、いわば自分たちの人生そのものを、わが子が丸ごと認めてくれたんですから。

それにしても、自分にとって都合の良いことだけでなく、病気や死までも含め、全てを恭しく受け止めて、そこから喜びを生み出していく。信心には、そこまでの力があるんですね。

《先生のおはなし》

「生きていてくれてありがとうございます」

兵庫県・洲本教会 松井金光

(ナレ)おはようございます。案内役の大林誠おおばやし まことです。わが子がある日突然、行方知れずになったら、親はどんなことを思うのでしょうか。想像しただけで胸が締め付けられますが、今日は実際にそんな体験をした人のお話です。

兵庫県・金光教洲本教会、松井金光まつい かねみつさんで、「生きていてくれてありがとう」。

(松井) 4年前の秋、岡山県にある金光教の本部に、10日間の出張中のことでした。ある夜、突然、家族から電話が掛かってきました。当時、

中学2年生だった娘の姿がどこにも見当たらず、家出をしたのかもしれない、という連絡でした。

私は、前日まで娘とLINE(ライン)でやり取りをしていました。その日は、いつになっても、「既読」にならなかったため、少し気になっていましたが、まさかそんなことになっていたなんて…。そこまで苦しんでいた娘の声を聞いてあげることができていなかった自分に腹が立ち、親としてショックを受けました。

実は、娘は中学1年生の途中から不登校になっていました。小学生の頃は、児童会の役員として積極的に活動する子で、中学校に入ってから、大好きな吹奏楽部に入部して、「高校は、憧れている吹奏楽の名門校に行きたい」と、毎

日一生懸命活動していました。

そんな娘が、ある日突然、学校へ行く時間になっても布団から出てこなくなったのです。私は、初めのうちは、「ちよつと体がしんどいかな？」というくらいにしか思っていませんでしたが、学校へ行こうとしない日が続けば続くほど、「このままでは内申点に影響してしまう。憧れの高校どころか、どこにも行けなくなってしまう」と、親として娘の将来が心配になり、毎日毎日、娘を布団から無理矢理引きずり出そうとする日々が続きました。

どうして学校へ行きたくないのか、本人に聞いても、はっきりとした理由は話してくれませんでした。そのうち私は、「きつと、親には言えないようなことがあるんだろうな、かわい

そうに。せめて、家にいる間はゆっくりさせてあげよう」と思うようになって、それから、無理に学校へ行かせようとするをやめました。

娘が家出をしたのは、不登校になってから一年ほどが経った頃のことでした。家族から連絡を受けた私は、すぐにでも飛んで帰りたい思いでいっぱいでしたが、立場上そうはいきません。残っている家族が、心当たりのある人たちへ連絡を取ってくれましたが、誰も娘からの連絡は受けていませんでした。

私はすぐに金光教本部の神前に駆け込んで、「どうか神様、何とか娘が無事でありますように。自殺をしたり、事件や事故に巻き込まれたりしていませんように」と、必死に祈り続けま

した。

しばらくして、家族から連絡が来ました。警察から、娘を保護しているから来てほしいと、電話があったそうです。しかしながら詳しい状況は分かりませんでした。

娘はどうして警察にいるのだろうか？どこもケガはしていないだろうか？何か事件に巻き込まれたのではないだろうか？とにかく心配で、警察まで迎えに行った妻から連絡が来るまでの数時間、私は本部の山の上にある、金光教の教祖のお墓の前で、地面に額を擦りつけながら、必死に娘の無事を祈り続けました。

数時間後、妻から連絡が入りました。娘は、心に溜まり続けていた、いろいろな思いが爆発して、自殺をするために家を出たのだそうで

す。ところが、家を出て街中を歩いていると、警察から声をかけられ、娘の状況を察した警察の方が、そのまま娘を保護してくださったのでした。

最悪の事態を免れることができ、私は、涙が止まりませんでした。神様が警察の方をおして娘を助けてくださったに違いのないと思えて、神様への感謝の思いで胸がいっぱいになりました。そして、娘が生きてくれていること、それがどれほど奇跡的なことなのか、どれだけすごいことなのか、愛しい人が「生きています」ということへの喜びを、心の底から感じられるようになり、神様へひたすらお礼を申し上げ続けたのでした。

あれから4年、娘は、その後も中学校へ登校

することはありませんでしたが、今は、通信制の高校に進学して、将来はピアノの調律師になりたいと、新たな夢を追いかけています。

毎日、目を覚まして布団から出てきてくれる娘を見るたびに、笑顔で好きなことをしている娘を見るたびに、そのために一生懸命アルバイトを頑張っている娘を見るたびに、心の中に熱いものが込み上げてきます。

生きていてくれて、本当にありがとうございます。

いかがでしたか。松井さんの、愛しいわが子にかける思いがひしひしと伝わってきますね。

失踪事件から4年経った今もお、松井さんは、生きていてくれるだけでありがたいと言います。でも私たち、なかなかそうはいかない

ものですね。どんなにありがたい気持ちも、時とともに薄れていき、心配や苛立ちがぶり返して、子どもを責め立ててしまいがちです。

難を逃れたことだけでなく、生まれてきたこと、あの小さな赤ん坊がここまで大きくなったこと、その奇跡を何度も何度も思い返しては、神様に感謝する。わが子の成長を見守る、松井さんの温かい眼差しは、きつと、そんな日々の中で醸し出されてきたものなんでしょうね。

《先生のおはなし》

「私の頭も痛むけれども」

徳島県・佐古教会 向井道江

（ナレ）おはようございます。案内役の岩崎弥生（いわさきやよい）です。良かれと思ってやったことを、全否定される。悲しいですね。

今日は、徳島県・金光教佐古教会、向井道江（むかいみちえ）さんのお話をお聞きいただきます。タイトルは、「私の頭も痛むけれども」。

（向井）もう10年以上も昔、私が大学生だった頃の話です。私は地元の大学に入り、弓道部に入学してからは、部活一色の楽しい大学生活を過ごしていました。昔から、人に嫌われること

が怖かった私は、「みんなに嫌われないように、周りを楽しませなくちゃ」という思いを持っていて、「今日、こんな忘れ物をしてしても、めっちゃ困ったんよ」とか、自分の失敗談をよく笑い話にしていました。また、友人や先輩が話し掛けてくれたら、「私は喜んであなたの話を聴いていますよ」と見えるように、できる限りの笑顔で受け答えることを心掛けていました。そのおかげか、大学生活では友人とも付かず離れず、交友関係もそこそ良い状態が続いていたように思います。

けれどもそんな時、部活の同期であった、理香ちゃんから、胸にグサリと刺さることを突然言われたのです。

「私、あなたの笑い声が嫌い。笑顔がむかつ

く」と。

この同期の理香ちゃんというのは、控えめだけれどしっかり者で、「私と違って、スマートでかっこいいよなあ」と、前から密かに憧れを持っていた人でした。そんな理香ちゃんが、部活の試合の応援中、先輩と笑いながら話をしていた私にいきなり、笑顔がむかつくと、苛立った表情で言ってきたんです。

今考えてみたら、相手に向かってそれだけのことが言えるというのは、逆に信頼があったんじゃないかなっていう気もするのですが、当時は、自分が良かれと思って頑張っていたことをきっぱりと否定されたことで、

「なんでそんなこと言われなあканの?」「笑い声が嫌いって、じゃあ、どうすればええんよ」

と、腹が立つやら、悲しいやら。

理香ちゃんにはその時、「あ…、ごめん…。」とだけ謝って、試合が終わってから、しばらくは一人で悶々としていました。

理香ちゃんから、これだけきつく言われたのはこの一回だけでしたが、それからもあるごとに、何やら冷ややかな態度をとられているような気がしますし、私にだけ、どこか厳しいような気がします。私も私で、理香ちゃんがいる時は思いっきり笑ったりするのを少し控えて、大人しく、苛立たせないようにと気を使い、理香ちゃんとは少し距離をとるようにしていました。

そこから状況は何も進展しないまま、卒業式が近くなった頃、部活の同期みんなが集まる機

会がありました。そこにはもちろん、理香ちゃん
の姿もあります。そして、みんなで記念写真

を撮り合っていた時、理香ちゃんのほうから私
に近づいてきて、「今までごめん」と、そっと
手紙を渡してくれたのです。その手紙の中には、
「いつも笑って楽しそうに過ごしているあなた
が羨ましかったです。自分もそんなふうになりた
いけれど、そうできないことに腹が立っていた。
その苛立ちをぶつけて、ひどい態度をとってし
まっていたんだ」ということが、謝罪の言葉と
一緒に書かれていました。

「あのしっかり者の理香ちゃんが、そんなふ
うに思っていたなんて」と、とても驚いたけれ
ど、単に嫌われていたというわけじゃなかった
という安心感もあり、最後にこうして思いを伝

えてくれたことは、私にとって、とてもうれし
いことでした。

その後も、人生の中では思いもよらない人か
らの悪意にぶつかることがあります。そのたび
に腹が立ったり、「自分が悪かったのかな…」
と落ち込みますが、ふと、もしかしたらこの人
も、理香ちゃんと同じように、自分ではどうに
もできない思いを抱えているのかもしれない
な。だったら、その抱えているものが少しでも
軽くなっていきますようにと、願うことも増え
ていきました。

金光教の教えに、「人に頭をたたかれても、
私の頭は痛みませんが、あなたの手は痛みませ
んか、という心になったらよい」というものが
あります。

さすがに、まだまだその境地には至らず、私の頭は、まだまだ痛みを感じますが、それでも、あなたの手も痛かったよねと、相手のことを思う気持ち。これを、神様は理香ちゃんをおして私に教えてくれたんだと思っています。

おられたことでしょう。
本音で語ることが難しくなっている現代の間関係の中で、相手を思うということ、改めて考えさせられました。

いかがでしたか。いつも明るい笑顔の人が、人に嫌われたくないと思つての行動だったとか、理香さんのように羨ましい気持ちを素直に言えず、強い態度に出してしまったとか、人間関係の難しさを感じます。そして、2人は、表面に出ている行動は真逆ながら、同じ根っこがあるようにも思いました。また、どちらの立場に立っても私は、切なくなりました。それ以上に神様は、叩かれた頭の痛さと手の痛さを感じて

《先生のおはなし》

「ままごと遊び」

福岡県・漆生教会 鳥越正克

（ナレ）おはようございます。案内役の岩崎弥生（いわさき やよい）です。

今日は、福岡県・金光教漆生教会、鳥越正克（とりごえ まさかつ）さんのお話で、「ままごと遊び」です。「ままごと遊び」。大変懐かしく、大好きな遊びでした。一体どんなお話なのでしょう。

（鳥越）戦後間もない私の幼い頃は、農家の庭先で、女の子が楽しそうに、「ままごと遊び」をしていました。「ああ忙しい、今夜は何を作ろうかしら」と、母親の言葉をまねながら、タ

ンポポの花で料理を作っていました。「ままごと」は、家庭の様子をまねする、ごっこ遊びです。「まねる」は元々、「まねぶ」という言い方で使われ、「まねぶ」と「まなぶ」は同じ語源であるとも言われています。子どもたちは、「ままごと遊び」の中で、炊事の大変さを学んでいたのでしょう。

私は幼い頃、学校から帰るとカバンを放り投げて、体の弱い母の手伝いをしました。七輪に火を起こし、買い物にも行きました。学校では褒められることのない私でしたが、近所のおばさんたちからは、「今日もお手伝いな、偉いわね」と声を掛けてもらい、たまには、あめ玉ももらいました。あめ玉をもらうコツは、「こんなにちは」と笑顔で、大きな声を掛けることだ

と学びました。家路に着くと母が、「ご苦労だったね」と頭を撫でてくれました。人が喜ぶことをすると、私もうれしくなることが分かりました。母に頭を撫でられた数は、男3人兄弟の中で、私が飛び抜けて1番だと思います。

私が小学3年生の時に、父と遊園地に出かけました。池には貸しボートが浮かび、丘にはチンチン電車や、くるくる回りながら上にのぼる、飛行機がありました。遊園地に着くと父が、「これは電車と飛行機の料金だよ」と、20円をくれました。ウキウキして歩いていると、白い服に赤十字のマークを胸に付けた、手足の無い人の姿が目に映りました。父に尋ねると、「戦争でケガをしてしまった人たちだよ。今は、国からお金をもらって生活しているから、心配しなく

てもいいよ」と聞かされました。でも、私はとてもかわいそうに思えて、10円を箱の中に入れました。でもすぐに10円入れたことを後悔しました。だって、乗り物が1つしか乗れなくなっただからです。すると父が、にこにこしながら私に20円を握らせ、「この20円は神様からのご褒美だよ」と言いました。父が信じる神様が、お金を2倍にしてくれることが分かっていたら、20円を入れて、40円にしてもらえたのに、残念でした。

私が成人のお祝いにと、父に誘われ食事に出かけた時のことです。食事が済み、席を立つ時に父が、不思議なことを言いました。「出会いは、神様から頂いたご縁だから、大切にしない」。そう言って席を立ちました。

父を送るためにバスに乗り、しばらく走ると、お寺の前のバス停でバスが動かなくなりました。運転士と女性が揉めている様子です。やがて、「どなたか1万円札を両替出来ませんか」と、アナウンスが流れました。すると乗客から、「小銭を持たないでバスに乗るとは非常識だな」と、女性を責める声が聞こえます。すると父が、「料金は私が払います」と申し出ました。恐縮した女性は、父に頭を下げながら、「お礼をしたいので連絡先を教えてください」と幾度も尋ねます。すると父が、「あなたはお寺参りの途中だと聞いたが、若いのに感心ですね。今日のことでも何かのご縁だと思う。私は、この料金はあなたではなく、お寺へのお布施として入れることにしたから、あなたは心配しなくてもいい

よ」と返しました。バスが動き出して後ろを振り返ると、女性が手を合わせて拜んでいる姿が、小さくなるまで見えました。今に思い返すと、戦争で傷ついた人を見た私が、かわいそうにと思う心の芽生えを摘むことなく、優しく見守ってくれた父の眼差し。その親子の姿をご覧になった神様が大変喜ばれ、「心の優しい子じゃ、20円あげよう」と父に託して、私に20円を下さったと思えるのです。バスの出来事も人々を思う父の行いが、神様や仏様の喜びとなり、女性も助かることにつながり、父はさぞかしうれしかったでしょう。今は亡き、父の素敵な生き方を思い出せば、「まねごと」ながら、優しい地域作りを目指している、私です。

いかがでしたか。優しさと子どもながらの抜け目なさが、かわいらしく思える、正克少年でしたね。いつも、お父さんとお母さんの信心に基づいた、優しい眼差しの中で、伸び伸び育てられた感じがします。そのご両親へも、更に神様の優しい眼差しが注がれていたのでしょうか。

バスの料金を払えず困っている女性に、思わず手を差し伸べた、お父さんの優しさあふれる行動には、利他の心、神心を感じます。お父さんの生き方がお手本となり、「まねる」が学びになって、その中で身についた優しさが、周りに広がっていく。いいですね。

まずは、私にも注がれている神様の優しさを感じていきたいと思います。



《信心ライブ》

「不安の渦に巻き込まれた時には」

(ナレ) おはようございます。今日は、金光教本部にお勤めの野谷雄輝^{のたにゆうき}さんが、令和5年6月にお話しされたものをお聞きいただきます。

(野谷) 私は、子どもを3人授かっております。一番上の長男が、今年の3月に、高校を卒業して、専門学校に通わせていただいております。アルバイトをしながら、アパートで一人暮らし。掃除、洗濯、炊事も、初めて尽くしてみたいですけど、自分ひとりですべてやっております。その長男が一人暮らしをして、一週間も経たないうちに、妻にこんなLINE(ライン)のメッセージを

送りました。

「何でも一人することは苦ではありませんけど、大変さは実感しています。気づかなかったけど、今までずっと、お父さんやお母さんが、私たちの知らないところで、いろいろなやってくれていたということを知りました。ありがとうございます」

というメッセージを送ってくれました。妻は、そのLINEを見て、ありがたくて泣いておりました。一人になって、一緒にいる時には見えなかった、感じられなかった、親の働きを感じたということなのでしょう。またひとつ長男が、大人になったなあということを思いまして、喜びました。

父の日に、また長男から家族のLINEグル

ープに、メッセージがありました。「お父さん、いつもありがとう」というメッセージをくれました。家族のグループLINEなんで、高校1年生の次男がそれを見て、冗談で私のふりをして、「えーよ。気にするな」という返信をしました。すぐに次男のいたずらだと気づいた長男が、「お前じゃねーよ。当たり前で感謝しろ」というメッセージを返しました。私はそのLINEのやり取りを見させてもらいまして、「いつもありがとう」という言葉。「当たり前で感謝しろ」という言葉。一緒にいる時は、なかなか聞かなかった言葉でしたので、非常にびっくりしました。そして、うれしかったんです。ありがたい言葉だなあと思いました。

長男が小さかった頃のことをよく思い出しま

す。生後半年の時に、アレルギー性の小児喘息（しょうにぜんそく）に罹りました。小学校3年生、8才ぐらいまでですね。寒い時期は風邪をこじらせて、いつも息ができなくなつて、入院しました。何度も何度も、命の危ないところを助けていただき、そして大きくならせていただきました。

そうやって、何回も入院をしてたんで、幼稚園とか学校を休みがちになりました、なかなか友達ができない時期もありました。そして、少し不登校気味になりました。不登校気味になった時に、当時の幼稚園の先生に、「発達障害の疑いがあるんじゃないか」と、そんなことを言われました。「検査に行ったほうがいいよ」ということで、遠い所にある病院で、何度も、長時間、検査をしてもらったこともありました。

そして同時に、周りの保護者の人たちから厳しい言葉というか、「あんたとこの子ども、おかしいんじゃないか」とか、きつい言葉を言われ、悔しい思いをしたこともありました。妻はよく泣いておりました。周りの子どもと比べられてしまう。そして、いつの間にか、私たちもその渦に巻き込まれて、子どもを他の子と比べて見てしまう。「将来大丈夫やろうか」と思っ
て、先の見えない不安に苛まれてしまう。毎日元気に過ごせていても、できていないことばかりに目が行きがち、ということがありました。

四代金光様のお言葉集『すべてに礼をいう心』という本があります。これは、私が子どもを授かった時に出合いました、私の信心の教科書とさせてもらっている本です。私はよく、その本

を読ませてもらい、心を落ち着かせ、心を整えさせてもらうことがあります。その時、読んだところで、「比べる」ということを言われている四代金光様のお言葉があります。少し読ませていただきます。

「力の入れ方。毎日毎日、手元のところへおかげを頂かせてもらいましょう。先のことばかりに気を取られて、今日一日の手元のところを忘れないように。先になれば、その日が、実は、今日の日なのですからなあ。今日一日のおかげを受けさせてもらい、今日一日をしのがせて（過ぎさせて）もらうように努力していくことずなあ。

子どもでも、あの子、この子と比べるとよく分かるような気がする。すると、白と黒のよう

に、あの子はできるが、この子はできぬと、良
いと悪いということになって、比べることによ
って、難儀なことが起こりやすい。比べること
で、難義をすることが多い。

比べることによってはつきりとさせて、難儀
なことになるよりも、おかげを頂くことに力を
入れるのが良いでしょう。よく見ることは大切
ですが、それで比べることをして難儀になるよ
りは、自分がおかげを受けるほうにいたしまし
よう」

こういう文章でした。

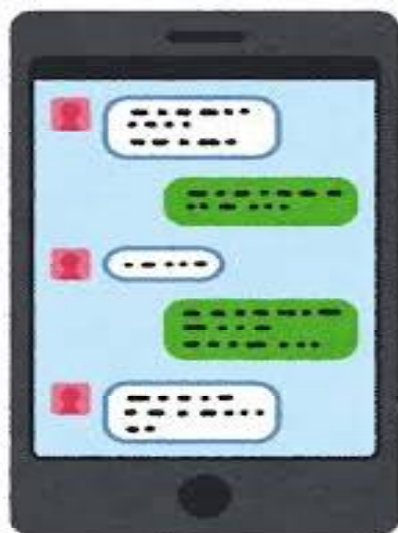
私はこの文章を読んでから、極力、「比べて
みる」ということをやめようと心掛けました。
そして、困ったことがあっても一つ一つ神様に
お願いしながら、その都度、おかげを頂いてき

ました。それでもいろんなことに、心がざわつ
くこともあるんですけど、おかげを頂くことに
力を入れさせていただく。そして、子どもと一
緒におかげを頂き、今日まで、ここまで元気に
過ごさせていただきました。これからもそのこ
とを忘れずに、いろんなところで、神様や皆さ
まのお世話になると思うんですけど、親子共々
に、世の中のお役に立つ人間にお育ていただく
ことを願っております。

いかがでしたか。不安の渦に巻き込まれてし
まった時、心のよりどころとなる教科書が、野
谷さんにとっては、金光教の教えでした。教科
書を読むことで、今まで難儀に向いていた心が、
自分を整えるほうへと向きを変えたのです。そ

して他の子と比べるのをやめて、一つ一つ神様
にお願いしながら、一つ一つ乗り越え、親子で
成長していきましょう。

皆さんは、心のよりどころとなるような教科
書を持っていますか？



《私からのメッセージ》

「泥まみれの靴」

兵庫県・三木教会 片島斎弘

皆さんおはようございます。兵庫県三木市にあります、金光教三木^{みき}教会で奉仕している片島^{かたしま}斎弘^{まさはろ}、41歳です。

さていきなりですが、皆さんは、「神様」というとどんなイメージが浮かびますか？ 杖を持つている、ひげを生やしたおじいさんでしょうか。どんなことでも願いを叶えてくれる存在でしょうか。今日は、皆さんのお時間をお借りして、私が思う神様の話をさせていただきたいと思っています。

私は、金光教の教会で生まれ育ちました。教

会にお参りに来る方は、いつも私に優しく接してくれました。父と母は毎日黒の着物を着て、お参りに来られる方のお話を聴き、お祈りをしていました。その合間には、まだ幼い私とキャッチボールをしてくれたり、神様が祀つてある畳敷きの広間で相撲をとってくれたり、とても居心地の良い場所でした。そんな温かく、恵まれた環境の中で育った私なのですが、中学、高校、大学と進むにつれて、「神様っていったい何なんだ」と考えるようになりました。目には見えないし、私には声も聞こえない。神様に願っても、そのとおりになるわけでもない。なつたとしても、それが神様のおかげなのかも分からない。父や母は、いったいどんな神様を拝んでいるのか。そういう疑問が出てきました。疑

間が出てきたばかりか、宗教が絡んだ悲惨な事件があったり、友達からは、「お賽銭でご飯食べてるんやろ？」などとかかわれたり。友達とは冗談のつもりだったのしようが、私にとっでは、宗教のことを不信に思うきっかけとなりました。両親としては、大学を卒業したら、金光教の教師になるための学校に行つてほしかつたみたいなのですが、私は、そんな気持ちになれず、卒業後は介護の仕事をしました。働いて2年目。今から18年前、23歳の時です。私に転機が訪れました。その日は仕事が休みで、教会に居ました。教会で、いつもお参りに来る方と久しぶりにお話をしていると、私が2歳の時の話をしてくれました。

私は2歳の時、難病に指定されている、ネフ

ローゼという腎臓の病気にかかり、8カ月間入院していました。この病気は、子どもの発育に悪い影響を及ぼす可能性があるとのことでした。母は毎日、入院中の私を抱きかかえて病院の屋上へ行き、教会のある方向と、金光教の本部のある方向に向かって手を合わせ、「将来この子は神様の御用をさせていただきますから、どうかお助けください」と、そうお祈りをしてくれていたそうです。神様の御用というのは、神様に奉仕をする仕事です。そんな祈りの中で、無事に治療を終えて退院することができました。

それからは、病気をすることなく、中学ではバスケ、高校、大学では野球に、一生懸命打ち込めるくらい、元気いっぱい成長することが

できました。

そして、ここからがその時してくれた話です。

私が退院した後、私は、姉と遊びに出かけたそうです。そしてヘトヘトになって帰ってきて、ドロドロに汚れた靴を玄関に脱ぎ散らかして、部屋に入った。それを見た母は、その靴を大切に持って、神様が祀られている所まで行き、座り、神様に頭を下げて、「靴がドロドロになるまで遊ぶことができました。ありがとうございます。」と、泣いて神様にお礼を言ったそうです。

私はこの話を聞かされた時、ハンマーで頭を殴られたかのような衝撃を受けました。私の知らないところで、私はずっと祈られていた。両親の愛情は十分感じていたつもりでしたが、自分が知っている愛情、自分が受け取れている愛

情は、ほんの一部にすぎなかったんだと、両親の深い思いに涙が止まりませんでした。

そしてこれまで、宗教に対する世間の不確かな評価や、友達が面白がつて言う言葉に惑わされて、みんなに祈られている、思われているという事実を大切にしてこなかったことを、反省させられました。

ドロドロに汚れた靴を見て、「靴をこんなに汚して！」とか、「こんなに脱ぎ散らかして！」と私を叱るのではなく、「ドロドロになるまで遊べたこと」にすぐさま感謝ができる。両親の信仰、つまりは金光教の信仰に触れ、カッコよさまで感じ、私もこうなりたいと思うようになり、金光教の教師を志すことになりました。

今、私が金光教の教師になった一つのきっかけ

けを話しましたが、なぜこの話をしたのかという、この話の中に、私が思う「神様」がいるからです。

金光教では、神様のことを親に例えることが多くあります。親は、わが子がつらい目にあっている、何とかしようと必死に動きます。自分の犠牲を顧みず、助けようとしています。幸せに生きられるように願ってやみません。そしてこれは、愛情のままに、子どものために当たり前にしていることなので、恩着せがましくありません。なので、子どもの立場からは、親の思いに気づきにくいものです。こちら側から気づこうとしないと、気づくことができないんですね。しかし親は、愛情をこちらが知らなくても、気づいていなくても、それどころか、その愛情に

文句を言っている、与え続けます。親とは本来、このような心を持っているのではないでしょう。か。

金光教では、「人は皆、神の愛しい子ども」と教えられています。ドロドロになった靴に敬礼を言うほど、自分の回復を喜んでくれた。それほど自分のことを深く祈ってくれていた。私は、この両親の思いの深さに、神様を感じるのです。私は、この心そのままが、神様だと思っています。

生きていると、うれしいこともあります、つらいこともたくさんあります。そんな時、神も仏もあるものかと思ってしまうがちですが、神様は私たちの親なのです。から、一番近くで応援してくれています。私は、何かつらいことが

あった時も、神様が絶対に良いようにしてくれるはず、このつらいことにも必ず意味があると信じて、神様を支えにして、前を向くようにしています。

そんな神様に支えてもらいながら、今日も一日、うれしく、楽しく、ありがたく過ごしたいと思っています。



金光教本部 ラジオ放送係

住 所 〒719-0111
岡山県浅口市金光町大谷320

電 話 0865-42-6453

FAX 0865-42-2114

メール w-master@konkokyo.or.jp

KONKOKYO

朝日放送 木曜日 あさ4時35分

旅送センターHP

「ここで聴く
おはなし」



「ここで
聴くおはなし
Podcast」



放送後の音声はWebサイトやPodcastで聴くことができます。